

3年目幼稚園教諭の職能形成をはかる研究者のかかわりについて 継続研究

著者	多田 琴子, 光成 研一郎
雑誌名	神戸常盤大学紀要
号	10
ページ	134-134
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1492/00000413/

2-P-3

3年目幼稚園教諭の職能形成をはかる研究者のかかわりについて—継続研究—

多田琴子
光成研一郎

本研究は、一人の新人幼稚園教諭を研究対象者とし、その保育活動を3年にわたって観察し、教師力の成長および新人教諭にかかわる課題を見出す継続研究である。1年目、2年目の研究を終えて見いだした研究対象者の課題は、保育の見通しをもつこと、自身の教師力を自覚すること、管理職の指導を自身の保育にいかすことの3点であった。そこで、3年目は、研究対象者が保育の見通しをもつことに視点を当てかかわることとした。

研究目的の一つ目は、研究対象者自身が、過去2年間の保育実践を基に、5歳児月別活動計画を立案し、保育の見通しがもてるようになることを目指す。二つ目は、研究対象者の作成した5歳児月別活動計画と園の教育課程を踏まえ、研究者として作成する5歳児年間指導計画立案の過程で、5歳児にふさわしい保育の有り様を解説する。研究対象者の幼稚園教諭としての職能形成をはかると共に、教師力向上への視点を析出するとした。結果、研究対象者が保育の見通しとして作成した5歳児月別活動計画を基に、園の教育課程を入れ込み、5歳児年間指導計画立案に至った。教師力向上の視点として見いだした課題は、①共同作業者として一緒に思考する。②課題が自覚できる対話を行う。③保育の見通しをもつために保育活動を「見える化」するである。しかし、研究者・管理職と3年目幼稚園教諭との保育観のずれが埋まらないという実感は残った。

2-P-4

プレセプシン複合体の形成機序の解明 — 相互作用タンパクの同定 —

溝越祐志
澤村 暢 澁谷雪子 野村秀明 鈴木高史

【背景】敗血症マーカーであるプレセプシンはCD14分子のN末端フラグメントである。健常人血清を強撹拌することで、本来よりも大きい分子量分画中にプレセプシン抗体と反応する複合体が、形成されることが知られており問題となっている。しかし、この高分子複合体が形成される機構や複合体形成タンパク質の精製・同定はなされていない。今回この複合体について検討を行ったので報告する。

【方法】同意を得た健常人血清を撹拌後、抗プレセプシン抗体感作磁性ビーズを用いた免疫沈降を行い、SDS-PAGE、ウェスタンブロッティング及び銀染色によりプレセプシンを検出した。また、現在 Myc tag, his tag 標識 CD14 を発現させるため、CRISPR/Cas9 システムを用いたゲノム編集の実験系の構築を行っている。

【結果と考察】リコンビナントプレセプシンを用いた検討で、目的とする13kDa付近にバンドを検出し、プレセプシン検出を確認した。また、撹拌後血清では、100kDa付近にバンドが認められ、複合体の形成が示唆された。しかし、銀染色を実施したところ、目的バンド以外にもバンドが検出され、非特異吸着が確認されたため、質量分析が不可能であった。現在、非特異吸着を回避するため、his及びmyc tag付きのプレセプシン作製を培養細胞系で試みている。